

---

# 黄泉の国と蘇の国

他摩 慈姑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黄泉の国と蘇の国

### 【Nコード】

N2658F

### 【作者名】

他摩 慈姑

### 【あらすじ】

自分で読みたいような小説を書いていきたいと思えます。

く読む必要のないところ

江戸時代末期

黒船が世の中を

騒がせていたこの時代に

この俺、杜邊月 トベツキ 蘇芳 スオウ

は命を落とした。

死因は餓死

武士の身分を、もつはずの俺は

武士は食わねど高楊枝という言葉の如く

貧乏でひもじくなりながら

それでもなお

毅然とふるまっていたら

あっけなく死んでしまった。

命を落としたのち四十九日間

俺は魂や霊という存在になって

自分の葬式を見て

この世の思い出の場所をめぐって

俺は黄泉の世界にその存在をおいた。

黄泉の世界に間際、

不思議と俺はまたこの世界に帰ってくる気がした。

時は流れる

黄泉の国にいる俺にその流れを感じることはできないが

きっと人がよみがえるための妖術かなにかを

成功させることができるような時代にまた、なったのだろう。

俺はまた、俺が餓死した世界にまた戻ることになった。

あの落とした命を、またもや拾われたようだ。

こうして俺は白い壁に囲まれた部屋で目を覚ます……。

く読む必要のないところ（後書き）

ここは読む必要がありません

～電話：式度目の復活参度目の誕生～

俺が目を覚ました部屋ではまず、

とても清潔な白い天井が見えた。

そういえば、前起きた時は何が見えつつけかな・・・？

俺はこれまた清潔で白いベットから

体を起こし周りを見渡した。

するとやはり、白い壁に囲まれていた。

見たところ、扉のようなものはない。

どうやって、おれはここに運ばれたんだ・・・？

そうだ、前起きた時は土壁に囲まれていたな・・・。

そんなことをぼんやり考えていると、

その部屋が白い壁に囲まれただけの部屋でないことに気づいた。

それはベッドから降りようとしたとき、気づいた。

いや、気づかないとバカみたいなことになっていたろう。

その部屋には、

床がなかった。

俺の下方には、真っ暗でどこまで続いているのか分からない

闇が広がっている。

ってか、ベッドが浮いてる……。

ベッドの下を見てみると、まるで自分が自分でない気がしてくる。

あまりに真っ暗過ぎて自分が飲まれそうになる。



その光景があまりにどうしようも無さ過ぎて

その光景があまりにも滑稽過ぎて

その光景がくだらないくらい愉快過ぎて

「……つくつくく、アハハハハッハハ！」

俺は笑いだした。

笑って、笑って笑って

愉快で不快でつまらなくて

痛快で楽しくて不愉快で

笑って、笑って、笑って

笑って、ベットから飛び降りた。

俺は馬鹿じゃないのかな？

間違いなく馬鹿だろう。

ああ、どうせ、二度無くした命だ。

何度だってなくしてやるよ。

そうは思ったものの

そう簡単に人の命は失われることはなく

「ぐふううあああああ！」

俺は、悲壮な悲鳴をあげた。

腹部に殴られたような感覚を受け

ベットの約下方5メートルで俺は停止した。

「精神が不安定のような……。」

まあ、実験段階ではよくあったことだ。」

どこからともなく……

否、まるで俺の頭から直接聞こえるかの如く男の声がした。

「なんだよ……誰だよ……何の用だよ！」

「ふむ……、アタッククォーター先鋒の刃は江戸時代末期のDNA記憶をもとに作ったはずだが

こんな言葉づかいをするのか？

それとも、何かのミスで間違えたのか？」

頭から直接話しかける男の声は、少し考え込むような間を開けて、  
こう聞いてきた。

「おい貴様、名を名乗れ。」

「杜邊月　蘇芳だ！」

「うむ、間違っではないようだが……」

江戸時代末期の言葉づかいとは違う気がするな。

わからない……やはりこれは……ブツブツ……」

頭に直接話しかけるようなこの男の声は、何だかわからないことを

小声でつぶやき始めた。

ふざけるんじゃないやねえよ……。

わからないのはこっちの方だよ！

「おい。俺の頭ん中でごちゃごちゃ言ってるやつ！」

次は俺がいろいろ聞き出す番だ。

「なんだ？」

「とりあえず、俺を自由な体勢にしろ

この姿勢はな何かときついんだよ！」

その時の俺の姿勢は、腹部だけを支えられ

手や頭の上半身と足の下半身が垂れ下がったような、

誰がどう見ても痛々しいとしか言いようがない姿勢だった。

「ああ、そうだな。」

頭に直接話しかけるように話す男の声は、納得したように言った。

すると、俺の体は上昇しもといたベットのところに着地した。

「ふう・・・っと、よし、おい！」

いろいろと俺にも説明してもらいたいことがあるんだが？」

俺は特に意味はないが大声でそういった。

「説明か・・・その仕事は、ほかの者がやる。」

あと数十秒後にその部屋につくだろう。

私もお前とだったらと話しているほど暇ではないしな。」

「え？・・・おい！ちょ！」

急に頭から直接話しかけるような男の声は聞こえなくなった。

そのかわり、

これこそどこからともなく

俺の前に、髪を一つに結わいた白衣姿の女が現れていた。

女は、手元の資料を読み上げる

「 杜邊月 蘇芳、アタッククオーター先鋒の刃、No・08764 。

「 なっ・・・。」

「 そして、シニ罪人。」

今回の黄泉帰りに面倒なことになりそうだ……。



く第弐話：シヌタメニ了（前書き）

あらまし：蘇った主人！どうなる？

## く第貳話：シヌタメニく

俺、否、拙者<sup>せっしゃ</sup>が生前の自分称だったらしいが

今の俺は「俺」と言っただ方がしっくりくる。

で

その俺は白衣姿のポニーテールねえちゃんに

今回どうして俺が黄泉<sup>よみ</sup>がえったかの説明を受けた。

「まあ、とりあえず実験台No.08764

あなたは、要するに実験台よ。まあ」

.....。

こいつと会話するのは骨が折れそうだ・・・。

「しかも、残念なことに成功作よ。まったく・・・残念。」

「成功したのに残念なのかよ。」

「うーん、そうね。私の私事をはさむと残念なのよ。私事。」

白衣の女はわざとらしく首を横に振り。

やれやれと言った仕草をして見せた。

「それに、8764回も実験してたらいい加減、成功するものよ。8764回も。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「ああ、ちなみにあなたの体を提供していただいたのは

某王国出身の兵隊さんスウーくんです！ちなみけどね。」

「俺の体はとくに朽ち果ててるだろうからな。兵隊？」

「そう！現在戦争中なのよ。そう！」

なんかこの白衣の女テンションあがってきてないか？

「その死にざまはかつこよかったよお！」

バカみたいに、でかい武器を持って、バカみたいに突っ込んで

バカみたいに死んだのよ。バカみたいな死にざま。」

バカにしてるじゃないか……。

「戦<sup>いくさ</sup>もとい戦<sup>せんそう</sup>争<sup>そう</sup>ってことは、

俺はその戦争のために黄泉がえったとかか？」

「さすが、成功作！察しがいいね、勘が働くね！

あなたは、戦争で死ぬために黄泉がえったんだよ！さすが！」

シヌタメニヨミガエッタ。  
。

愉快すぎるぜ……。

ところで、どうでもいいのだが

この白衣の女、ベットに座っている……。

つまり俺の隣に座っている。

すごい香水臭いぞ……。

ま、どうでもいいのだが……。

「ところで、女、なんで俺なんだ？」

「女、じゃなくて、名前があるのよ。玖礼クレイっていう名前がね、女じゃないくて。

なんつていうか、伝説というか、お告げというかで、

ある7人を黄泉よみがえらせる必要があったのよ。なんていうかね。」

「7人……？」

「あなたが最後の一人よ。あなたが」

「俺が最後の一人……。」

「でも、あたなともう一人を残して全員死んだけどね。あなたと一人」

「  
はあ？」

「あつ、もうこんな時間、続きは8時間後にするね。こんな時間。」

「いやいや、まだ聞きたいことがたくさんあるんだよ。」

なんだよ死んだって、なんだよ先鋒アタッククオーターの刃やって、

なんだよ伝説って

っ!？」

「そんなことは、第3話で明かす必要はないでしょ。そんなこと・・・」

「っ!？」

目の前が。

ゆっくりと。

真っ暗に。

•  
•  
•  
o

ゝ第貳話：シヌタメニ（後書き）

中途半端で終わる！なんて嫌な小説！



く第参話・出撃だよ出撃く（前書き）

ちよつと急展開

〈第参話：出撃だよ出撃〉

それは突然のことだった。

「出撃だよ！出撃！」

きっかり八時間。

俺の腕についている。

マネージメントクロック  
管理時計―（寝る前に説明を受けた）に、よって熟睡していた俺  
は

白衣姿の女の声で目が覚めた。

注意しておくがナース服ではなく白衣だ。

何の役にも立たない注意だったかもしれないけど・・・。

「さっさと起きる。さっさと！」

この白衣姿の女。もとい玖礼クレイは、

俺を起こすと、「そんじゃあ出発だよ。そんじゃあ。」といい

ワープした。

・・・。。。

ワープした？

俺と一緒に？

テレポートの間違いでは？

この際どちらでも一緒では？

俺は、床がないのにもかかわらず、

浮いているのか、下に実は床があるのかわからないベットの从上から

消えうせた。

ワープした。

ワープって……。

と・に・か・く！

今俺がいる場所は、武器庫のようなところ。

日本刀や長巻、薙刀、弓矢がたくさんある。

俺の時代にみた城の武器庫と同じようなところだ。

「蘇芳くんがどんな武器を使うかわからなかったから

江戸末期に使われていたような武器を集めてみたよ。蘇芳くん。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「あれれ？どうしたの？江戸末期だから、鉄砲が欲しいとかかな？あれれ？」

「ああ、とりあえず、鉄砲も欲しいが、まず説明が欲しい。

俺は今から戦<sup>いくさ</sup>に出るのか？」

「そうだよ。だから、出撃って言ったし、

だから、武器庫、かつこ、江戸時代末期、かつこ閉じ、に来たんだよ。そうだよ。」

・・・・・・・・・・なるほど・・・・・。

そういうことなら・・・・・・。

久々に愉快になってきたぜ。

俺は、近くにあった日本刀と短刀をとり、

腰に。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今頃だが

俺は服を着ていなかった・・・。

「あ、服なら、あっちにあるよ。服なら。」

俺は玖礼<sup>クレイ</sup>が指さした方向にある。

服を適当に選び。

刀を帯刀した。

「鉄砲も欲しい。」

「どんなのがいい？最新のビームライフルもあるけど、

坂本竜馬が使っていたようなものもあるよ。どんなのがいい？」

「最新びいむ？坂本竜馬？どうでもいい、俺の時代のやつを出せ。」

俺は鉄砲を受け取り。

「準備できたぜ。」

「それじゃあ！出発！じゃあ！」といい

ワープした。

．．．．．。

ワープした？

俺と一緒に？

テレポートの間違いでは？

この際どちらでも一緒では？

デジャブな感じを受けつつ

戦場に降りたつた　　。

ゝ第参話・出撃だよ出撃ゝ（後書き）

でも展開は遅い。

ゝ第肆話：孤独一人ゝ（前書き）

ちよつとバトル



## く第肆話：孤独一人く

ここは戦場

戦場はいつだって孤独だ。

たとえ味方の軍がいようと

戦うのはいつも一人だ

今だってそうだ。

目の前にはざつと30近くの敵

見方は俺独りぼっち。

．．．．．？

30近くの敵はユニークな形の武器らしきものを持っている。

俺はなまくら刀と時代遅れの鉄砲。

．．．．．？

ナマクラ刀はとうに折れ

時代遅れの鉄砲は弾切れ

その上俺は敵には囲まれ

・・・やれやれだぜ。

おかしいななんでもこうなったんだ・・・？

ワープして・・・戦場に来て・・・

味方がいないって聞いてなくて・・・

時代遅れの銃で先制攻撃をしたら、

思った以上に敵が多くて・・・

そのうえ死ぬ前の全盛期より体が動かなくて・・・

弾は切れるは、刀は折れるは、心も折れそうだぜ・・・。

俺はもっと強いんだよぉ・・・。

「どうした、得意のSFチックな能力は使わないのか？」

敵のリーダー格の男が、おれをそんなふうに罵ってきた。

SFチックな能力？

白衣ポニーテールの女こと玖礼<sup>クレイ</sup>とかが使ってた能力か？

「その能力って何だよ！？」

「ああ？とぼけるなよ！？てめえらは戦争の理由も忘れたのかあ？」

リーダー格の男はハン！と笑い。

「一人で飛び込んできたと思ったら、とんだお笑い草じゃねえか！」

と、言うと思っていたユニークな形の武器で

俺の息の根をとめるべく襲いかかってきた。

俺は間一髪、右に身をひるがえしかわす。

ところでこのユニークな武器

形はユニークとしか言いようがない。

使い方はこれもまたユニークとしか言いようがない。

伸びたり。

割れたり。

増えたり。

光ったり。

まあ、ここまで言っても、

大多数の人が解らないだろうと我ながら思った。

説明べただ。

そんな下らなくユニークなことを考えているうちに

俺は、つまづき転び

ああむけに倒れた  
。

さよなら人生。

これで三度目。

人に殺されるのは、二度目か・・・・。。

俺が見上げて見えるのは

リーダー格の男。

そいつはユニークな武器で・・・

・・・

俺に

・・・

とどめを

.....

[illegible]

俺が見上げていた男は、

驚愕していた。

ふと、俺は計り知れないほどの恐怖を感じた。

次の瞬間には、その男を含む

俺の目の前の30近くの敵は吸い込まれるように

一か所に集まり、

ちようど押しくらまんじゅうでもするよつに

否、そんな甘ったるいものではなく

万力にでもかけられているかのように

やがてそれは、耐えられなくなつたかのように

潰れた。

俺の周りに鮮明な血が飛び散る。

もはや肉塊と、化した『それ』は、未だに縮小し

人一人分の大きさになると無造作に地面に落ちた。

俺はただそれを口を開けてみているしかなかった。

すると、肉塊に近づく人影があった。

「老若男女容赦なし、それが戦場でのこのアタシのポリシー。」

女性の声だった。

声というのは、ちょっと違う。

目を覚ましてすぐ聞いた男のように

頭に直接語りかけてくる。

「あ、あなたは・・・？」

いつもの自分に似合わず謙譲的な言葉遣いになってしまった。

「このアタシ？そんなの決まってる。」

一呼吸置き。

「伝説の七人が内一人。穢れの了<sup>レジェンドエンド</sup>こと、楔<sup>みそぎタ</sup>琥<sup>ター</sup>子  
(ここ)だ。」

俺は計り知れないほどの恐怖を確信だと知った……………。



ゝ第肆話：孤独一人ゝ（後書き）

新キャラ登場

ゝ第伍話・失敗と失敗ゝ（前書き）

久々の投稿

## 〈第伍話：失敗と失敗〉

「なんちゅーか、信じるものは救われるっていうけど、アタシが信じるのは、アタシだからアタシ自身は救われるだろうかね？」

そこで彼女は、もはや原型をとどめていない敵兵を見るのをやめ、僕の方を振り向き言った。

「マイクオーター【創造の友】、ウオータークオーター【不止の病】ミスホワイト【空振】マッドグリーン【発狂】ミドルレッド【真芯】、彼女らの名前をあなたは知っているだろ？」

いやいや、しらねーよ

何それ。

そんな俺を無視して、みんぎこ楔瓠々と名乗る彼女は続ける。

「ザ・ティナリー ザ・クオーター【大三元と四界人で構成されるアタシたち七つの失敗のうちN〇・07777である、

アタシより先に生まれた5人　つまり、さっき5人の名前の人はこのあたし自身の強さの証明のために消えてもらった。」

なんだかわからんが、こいつが俺が寝る前に玖礼が言ってた伝説の七人とかを壊滅させたやつだっということがわかった。

こんなクチの悪い女が助けて……くれたのか？

望んで黄泉帰ったわけではないが、命が残ってるのはうれしいこと

だぜ。

あれ？

でも、まてよ・・・。

これは良く考えなくても分かる気がするが、今までの5人をどうにかしたんだから

こんど、この奇天烈女が次を取る行動は  
。

ブウン

何かが空を切る音がした

その音より早く俺の体は後ろに身を翻した。

やっぱり・・・。

なんだ今の？

見えなかった・・・。

「一般にあとからできたモノのほぅがよく出来るもの、だから5人を消すことができたことは当たり前。でも、あなたはまだ経験が足

りない、実績が足りない、功績が足りない。言ってる意味わかる？」

ブワァン

さらに後退する。

また何かが空を切る音がした。

相変わらずそれが何なのかは分からない。

「消すなら今がお買い得だってことだよ」

そう言って、楔はゆっくりと歩いて近づいてくる。

どうするよ。

・・・ん？

死んでいいんじゃないのか？

三度目の死亡だ。

何度も生きるのは疲れる。

悪くない。

そうやって腹をくくると、俺はその場に座り込んだ。

「なんのつもりだよ。」

楔琥々は、特に気にしていないように尋ねた。

「もう人生は二回経験した。よく分からないことに利用されるなら死んだ方がましだ。」

「へえ、イサギいいじゃねえか。嫌いじゃないぜ、そういつの。」

「ふっ……。」

「じゃ、遠慮なっ……?」

その時、楔琥々の前に俺はいなかった。

「時間切れかよ。」

彼女は一人ただそうつぶやいた。

〈第伍話：失敗と失敗〉（後書き）

めんどくさい言葉をいっぱい出してみたよ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2658f/>

---

黄泉の国と蘇の国

2010年11月16日18時44分発行